第１部講演

ブラジル・カストロ市のドイツ系移民

山　本　　充

Ⅰ．ブラジル・パラナ州におけるドイツ系移民の変遷

専修大学文学部環境地理学科の山本と申します。よろしくお願いいたします。今、ご紹介いただきましたように、私のフィールドは、ヨーロッパ、中でもドイツ語圏、ドイツとオーストリアです。昨年から、丸山先生に誘われまして、ブラジルのほうにでかけて、ドイツ系移民の調査をさせていただいています。私としては、どうしてもドイツ語の文献、資料からドイツのブラジルへの移民をみるという立場になります。きょうは、途中経過といいますか、今まで得た知見を紹介し、皆さんからいろいろご意見、ご批判をいただければというふうに思っております。

図１は、統計が十分にそろう1800年代後半から現在にかけての、ドイツから世界各地への人口流出を示したものです。19世紀のドイツは人口の移出国でした。1841年から1928年にかけて600万人のドイツ人が海外へ、主としてアメリカ合衆国、次いで、カナダ、ブラジル、アルゼンチン、オーストラリアへと流出しました。特に、1800年代は、非常に大きなピークが現れる時期であり、年間20万人を超える人が、主として北アメリカ、アメリカ合衆国へ流出しています。流出の理由として、ドイツの人口が増える中で、見合った就業機会に乏しく、海外への移民により魅力的な機会がえられるという期待がありました。その後、ドイツでも、景気も良くなって、就業機会をえることができるようになると、こうした海外へでるという流れは一時、抑制されま

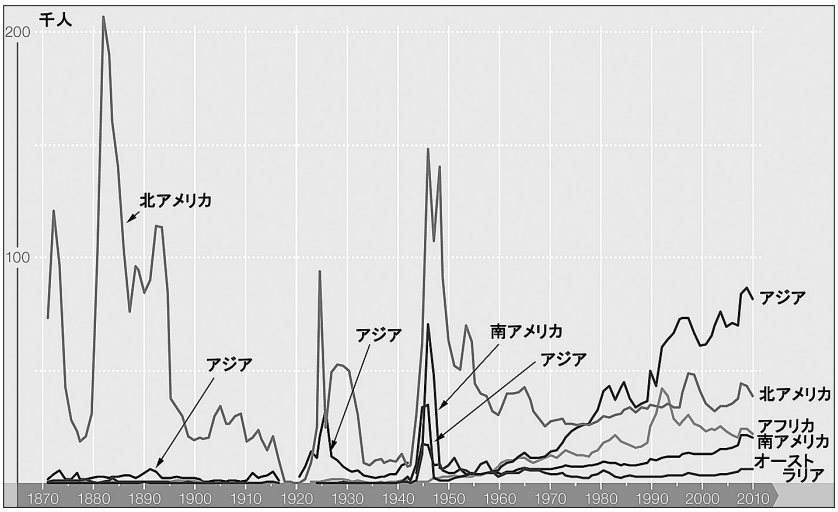

図１　ドイツから海外への人口流出数の変化

（Rahlf, T. ed. 2015. Deutschland in Daten - Zeitreihen zur Historischen Statistik. Bundeszentrale für politische Bildung, 51. を改変）

す。これが再び外にでる動きがでてくるのが、第一次大戦後です。この時期、ドイツも経済危機を迎え、やはり、アメリカ、とりわけ北アメリカへの流出が非常に目立ってきます。

さて、南アメリカへの人口流出ですが、1920年代に現れてきます。今日お話しするドイツ系移民集落のテラノーヴァへの入植が始まるのは1933年で、南アメリカへの流出のピークから若干過ぎた頃のブラジルへの移住となります。この図をみると、第二次大戦後、再び、ドイツから海外への流出が顕著になってきます。ドイツの経済成長とともに流出の波は衰えていくのですが、非常に興味深いことに、現代に至るまで、海外に流出する動きはそれなりに継続しています。特にアジアへの流出、これが非常に顕著です。南アメリカへもアジアほどではないにしても、徐々にその数は増加しています。現代における新しい移民は、どのような動機をもって海外にでていくのか、そして、古くからの移民とどのような関係をもっているのか。今、ドイツといえば、移民・難民が入ってくる流入国としてのイメージがどうしても強いかと思いますが、実はドイツからでていく人も多い。この辺りも注目してみれば面白いのではないかと思います。さらにいえば、私の人口地理学を専門とする知人は、タイ在住のドイツ人の中で、現地の方と結婚して、そのままバンコクだけではなくて農村地帯に住む人がけっこういて、そうした人たちを調べています。

次の**図2**は、ブラジルに入ってくるドイツ人移民の数の変化を示しています。ブラジルへのドイツ人移民は、1824年に始まり、20万人近くが移住しました。**図1**における南アメリカ全体への移民数の推移とむろん平行していますが、1920年から1929年の10年間は、期間全体でも1年当たりでも、非常に数が多い時期になります。このピークから少し遅れた時期にテラノーヴァへの移民が行われたことになります。

図3は、ドイツのライプツィヒにある連邦地誌研究所で作成されたものです。この研究所は、ドイツの地理を中心とした中央ヨーロッパの地域研究の拠点であり、ナショナルアトラスなども作成しています。この研究所は海外に移出したドイツ人についても、さまざまな主題図を作って

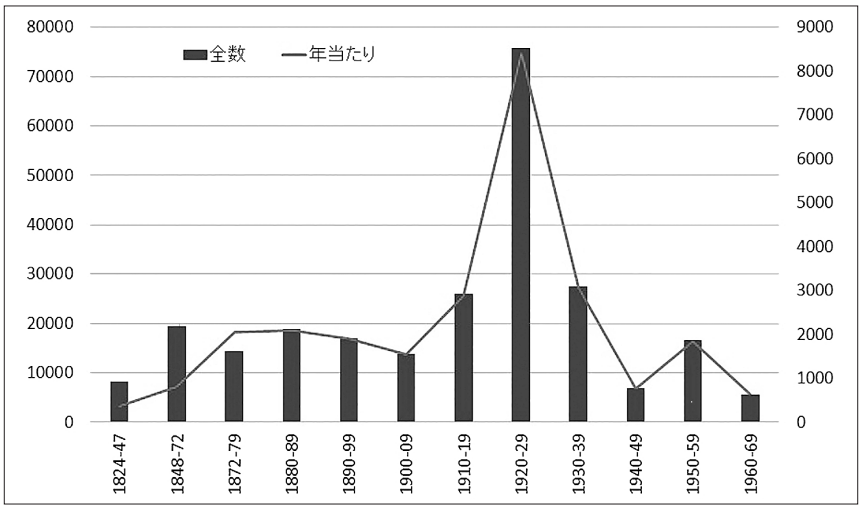

図2　ブラジルにおけるドイツ人移民数の変化

（Gregory, V. 2013. Zur deutschen Einwanderung in Brasilien. *cadernos adenauer xiv edição especia*, 121. より作成）

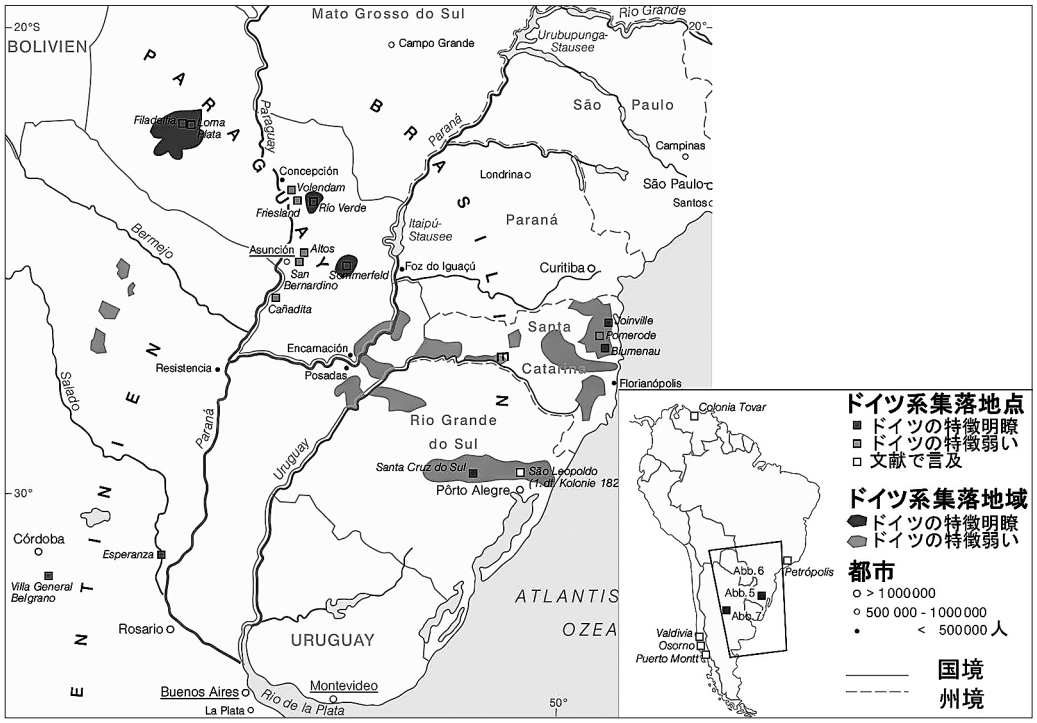

図3　ブラジル南部周辺におけるドイツ系集落の分布（2005年）

（Leibniz-Institut für Länderkunde et al. 2005. *Nationalatlas Bundesrepublik Deutschland Band 11 - Deutschland in der Welt*, 74. を改変）

います。この図は、ブラジルだけではなく、周辺のパラグアイ、アルゼンチンの一部におけるドイツ系の住む都市と集落のある地点、集落の分布する面的な広がりをもつ地域が、そして、それぞれについて、ドイツ文化の特徴が明瞭に現れているか、少しだけ現れているか示されています。この図によると、パラグアイからアルゼンチン北部、そして、ブラジル南部にかけてドイツ系集落が分布しています。ブラジル南部では、サンタ・カタリーナ州とリオグランデドスル州に集落が集中していることがわかります。この北のパラナ州では、クリチバやロンドリーナといった都市にドイツ系が居住し、農村部のドイツ系集落は示されていません。パラグアイのドイツ系居住地区ではドイツ色が非常に濃いのに対して、ブラジルでは、ドイツ文化の現れが薄いとされています。ただ、その中で、ブルメナウやサンタクルーズ・ド・ソルといったドイツ文化の色濃く残存する都市もみられます。これから紹介するテラノーヴァは、パラナ州にあり、パラナ州の州都クリチバの西方に位置しています。パラナ州には、テラノーヴァ以外にもドイツ系の集落が存在していますが、南のサンタカタリーナ州ほど密度は高くなく、点在しており、顕著にドイツ文化の色彩というものは現れていないと位置づけることができます。

フグマンというドイツ系研究者が書いた『パラナ州におけるドイツ人』（1929年）によると、パラナ州へのドイツ人の移民は1829年のリオ・ネグロへの入植が最初です。こうした最初にきたドイツ人たちは、旧ドイツ人といわれています。その後、1850年代になって、サンパウロなどブラジルの他の地域に入植したドイツ人が、パラナに再入植してきます。そしてそれを追うように、

1877年から1879年頃、今度はヴォルガドイツ人がやってきます。

18世紀半ば以降ドイツからロシアに移住した人々がいます。とりわけドイツの南西部からロシアのヴォルガ川流域へ移動がみられ、こうしたヴォルガ流域に入植した移民を、ヴォルガドイツ人と呼んでいます。彼らはドイツの南西部、プファルツ地方やシュヴァーベン地方、ヘッセン地方、フランケン地方からヴォルガ流域に入植し、さらにまた、19世紀後半になってブラジルまで移住してきたことになります。彼らヴォルガドイツ人は、ドイツ語を話し彼らのみで交流関係を築き、ドイツ文化を継承してきたといわれています。

その後、20世紀になって、ドイツ本国から移民がやってくるようになります。ブラジル政府の移民政策にもより、ドイツ人だけでなくて、オランダ人、オーストリア人、ポーランド人、そしてルター派の人々もパラナ州に入植してきました。ルター派入植地に新たにドイツ人、オランダ人が入植したことで、不満が高まり、不穏な状態となり、再び移動する人たちもあったように、必ずしも移民同士がお互いうまく折り合って生活していたわけでもない側面もありました。

第一次大戦後、さらにドイツ本国からの移民が増えてきます。先述のように、経済危機を背景に失業も増える中で、ブラジル、そしてパラナ州への移民が増えてきますが、その際、ブラジル政府のサポートを受けて入植する層と、一方で、移民をあっせんする民間の移民会社を通して入植する層がいました。民間の移民会社は一般に、本国の富裕層とブラジルの既入植地からの再入植者を対象としたといわれています。ただ必ずしも、富裕層のみを相手にしたわけでもないと思われます。後述のテラノーヴァへの入植は、民間の移民会社によって企画と募集がなされて行われました。

第二次大戦後になって、パラナ州にはドナウ・シュヴァーベンと呼ばれるドイツ系の移民が入ってきます。ドナウ・シュヴァーベンとは、18世紀に現在のドイツ、バーデン・ヴュルテンベルク州のシュヴァーベン地方からドナウ川流域を中心とする現在のハンガリーとクロアチア、セルビア、ルーマニアに移住した人々を指します。彼らは、ハプスブルク家がオスマントルコとの戦争によって征服した領地の開拓のために入植しました。前述のヴォルガドイツ人と同じように、彼らの中からも再度、ブラジルへ移出するものがでてきます。ヴォルガドイツ人とドナウ・シュヴァーベンは、ブラジルへの移動の時期は異なるものの、彼らのドイツにおける故郷は主として南西ドイツです。南西ドイツであることは非常に重要な事実です。伝統的なドイツの相続制度をみると、ドイツの南西部は均分相続卓越地域となっています。子どもが3人いれば3人に均等に財産を、農家であれば農地も均等に分割していきます。一方、ドイツの北部一帯は単子相続卓越地域です。すなわち、子ども1人だけが、財産、農地を受け継いでいくわけです。農村地帯において、均分相続が代々実行されていくことで、当然、農地が細分化されていき農業経営もますます零細化していきます。こうした均分相続制度に基づく農業の零細化も移民輩出の背景にあるのではないかと考えられます。ドイツのいわゆるゲルマン法における伝統的な相続制度は単子相続ですが、ドイツ南西部は均分相続になっているのはどうしてなのでしょうか。これはローマの影響です。ドイツの南西部は、ローマ帝国の一部になっていた時代もあり、ローマ法の伝統である均分相続を採用しました。

Ⅱ．テラノーヴァにおける入植地の建設

ようやく、テラノーヴァについて言及していきます。このテラノーヴァへの入植を推し進めた会社はGesellschaft für Siedlung im Auslande海外移民会社といいます。この移民会社が移民を募集するために作成したパンフレットがあります。テラノーヴァに加えて、パラナ州北部のローランディアという入植地向けのものです。テラノーヴァに関してどのような情報が提供されているか、入植地としてのテラノーヴァの状況を、このパンフレットをもとにみてみたいと思います。ブラジルへの入植を促す立場から、自分の会社を使って入植をしてもらうということを前提にしていますので、当然ですけれども利点が強調され、逆に不利な側面にはあまり触れられていなかったり、過小評価されていたりすることに留意する必要があります。

まず位置について、ブラジル南部の幹線サンパウロ・リオグランデ鉄道に近いことが挙げられます。気候は亜熱帯で、季節変化が明瞭であり、日較差は大きく年平均降水量は1500mm程度で雨季と呼べる時期はなく、健康的な気候であることが強調されます。風土病も、マラリヤその他の熱帯の病気はなく、スナノミ以外の虫の害はない。そして、毒蛇もめったにみられず、咬まれたとしても血清が入植事務所に用意されているとし、安全であることが強調されています。

植生についても記載があり、開けた草原で森林もあるとしています。ただ、この草原は背の高い草からなり、栄養分に乏しく、そのままでは農耕に向かないことが示されています。森林においては、有用樹は、先の所有者によって既に伐採されており、木材からの収益は期待できないこと、乾燥期に、切り倒した森に火をつける際には火が既存の森にうつらないように気をつける必要があること、この場合、火をつけたものが補償しなくてはならないことが明記されています。森林の開墾が耕作の前提になっているわけです。ちなみに、この入植地はもともと、大農場ファゼンダの所有地を、この移民会社が買い取って、それを細分化して移民に分譲したものです。

このテラノーヴァ入植地は、パラナ州の州都クリチバの北西方向に位置するカストロ市の市街地南部にあります。なだらかな丘陵状の地形で急傾斜は少なく、森林では、平年の天候であれば、すぐに施肥なくよい収穫がえられる一方、草原では、収穫をえるためには施肥が必要であると明確に指摘されています。加えて、入植地からカストロまで、ブラジルの状況では良好な、しかし舗装されていない道路が整備され、集落内でも良好な道路網を構築したとしています。このように道路によるアクセスに関しては問題ないようにいっていますが、現在、カストロ市街からテラノーヴァへ行くにあたっては、でこぼこの非常な悪路を通っていかなくてはなりません。実際、初期の入植者の手記には、道路が穴だらけで非常に悪いことも書いてあり、宣伝文句とは大きく違うということがいえます。

今一度、テラノーヴァの入植地の場所をみてみます。カストロの町が北方約10kmにあり、西南西の方向約10kmのところにオランダ人入植地カランベイがあります。ここにはオランダの民家が展示され、彼らの歴史を紹介する野外歴史博物館があります。ここはいわば、オランダ系移民の拠点であり、この後、丸山先生がお話しされるもう一つのオランダ人入植地カストロランダは北方、カストロの東にあり、オランダの両入植地の間に挟まれるかたちでドイツ系移民の村があることになります。テラノーヴァ入植地の北は低湿地となりあまり森林はありません。一方、テラノーヴァが位置するところから南は丘陵であり、草地と森林が分布するようになります。こ

の場所がどうして選ばれたかのかということですが、移民会社とドイツ系ブラジル人の専門家との密な連携のもとに選択されたと記されています。入植地としてここが良かろうとドイツの専門家がお墨付きを与えたところは、低地ではなく、森林も草地もある丘陵地帯だったわけです。一方、オランダ人は北の低地の方を入植地として選んでおり、民族ごとに異なる土地条件の場所を入植地に選んだといえます。そして、そこでは、それぞれが選んだ場所は、それぞれの故郷の主たる土地条件に類似しており、新しい土地においても、故郷で行っていた適応戦略を採用することが可能であったといえましょう。

さらに、この移民会社が試みたことは、家々が集まった集村をつくろうとしたことです。開拓村というと、イメージとして、また、実際にも、家々が耕地の中に点在する散村の形態をとることが多いわけです。集村をつくることで、入植者間の交流が容易となり、経済的、文化的利点を有すると会社が考えて設計したとのことです。1933年の入植当初におけるテラノーヴァ入植計画図があります。これによると、入植地の中央に住宅地の区画が設けられています。一つ一つの区画は小さく、移民会社はここに集村のかたちで住宅を集中させようとしたことがわかります。ここは、草地地帯であり、耕作にはあまり適さないために、面積の小さな耕地を伴う住宅地を割り当てたといえます。そして、住宅地の南の森林地帯に入植者それぞれの耕作地を配置するような計画をもっていたようです。どちらの区画においても一筆一筆は短冊状の長方形の形状をとっています。また、入植地の北に家畜を放牧する共同の放牧地が設けられています。この放牧地と住宅地の間のカストロへの道路沿いには都市的な機能を提供する区画が設けられています。靴職人など諸職を有する人が入植した場合、そうした職を活かして開業して営業することを想定しています。また、カトリックとプロテスタントの教会がそれぞれ計画されましたが、実際には、カトリックの教会だけが建設されました。

この住居として割り振られた場所に実際に住居が並んだかどうか、実はその辺りはまだ確認できていませんが、現実には、崩れていくような状況が生まれます。家々が集まったかたち、塊村ともいいますが、こうした集村をつくることは、ヨーロッパにおいてはドイツ人が伝統的につくってきた集落のかたちです。ヨーロッパの中央部では、ドイツ人、すなわちゲルマン民族が塊村を、そして東のスラブ民族地域に行くと、街路村といって、道路の両側に家が並ぶ集落のかたちが卓越してゲルマンの塊村と対照をなします。そういった意味では、本国ドイツにおける伝統的な集落の形態をブラジルに移植しようとした試みをこの会社は行ったともいえます。ただ、テラノーヴァを開発し分譲した会社は、このテラノーヴァと先のローランディアしか扱っていません。他の移民会社でも同様の試みを行ったのか、この会社はその後どうなったのか、もう少し追ってみたいと思います。

テラノーヴァにおいて生活や農業を実際にどんなふうにやるべきか、やってほしいかといった指針もこのパンフレットに示されています。当然ですが、最初に家を建てることが必要です。その上で、森林を耕作地とします。そのために天然林を伐採し、数週間乾燥させた後、火を入れます。入植者とその家族が集約的に耕作できるだけの森しか切り開いてはいけないし、森の伐採と家の建設に外部の労働者を用いてはなりません。なぜなら、家族で経営する比較的規模の小さな経営では、賃労働をまかなうことはできないからです。一生懸命働くことのみで、経営を確立す

ることができるとしています。

それから、地下水面は浅いので、井戸掘りは多くの場合、簡単であるとしています。これは実は非常に重要なことです。というのも、居住地区と想定されている場所以外でも、森林地帯の耕作地区とされている場所でも水をえて住むことが可能です。このことが、後にお話しする居住の分散化をもたらしたともいえます。加えて、居住地区の区割り一筆一筆どれもが河川にアクセスできるように配列されています。森林地帯の耕地においても同様で、基本的に河川にアクセスできるように区割りがされています。これは、一部を放牧地とした際に、家畜が水を飲めるようにするためです。

推奨される農業のかたちは、森林の開墾地で飼料用トウモロコシを栽培した上での豚の肥育と酪農であるとされています。ただし、生乳の需要はわずかにしかないので、バターやチーズに加工して初めて近隣のカストロで販売の可能性があると示唆されます。また、草原部分は痩せた土地なので、骨粉や石灰など肥料を投入して初めて収穫が可能であるとしています。

テラノーヴァにおいて生活をしていく上でのサポートも示されます。近くのカストロに行けば、銀行や病院、医者、教会、学校があり、カストロはまた、作った農作物の販売マーケットになります。このカストロが、生活に必要な様々な物やサービスをえる場所として位置づけられています。それから、テラノーヴァに移民会社の事務所を置いて、さまざまな相談に乗っていました。これはその後、閉鎖されることになります。加えて、ドイツ人教師のいるドイツ人学校が2校計画されていましたが、実際には1校しかできませんでした。カトリックとプロテスタントそれぞれの建設が計画されていた教会もカトリックの教会ができただけです。今でもこのカトリックの教会は継続して存在しています。

Ⅲ．テラノーヴァにおける入植者と農業の実践

さて、こうした移民会社の募集により、テラノーヴァにどんな人が入植してきたのでしょうか。村の人が入植者に関する手書きの記録を取っていらっしゃいまして、それをもとにみてみます。ただ、入植者の中には、1933年に入ってきたものの翌年にでていったり、流出した人も結構な数でいることも事実です。

テラノーヴァに入植した人たちのドイツの出身地として、第一に、ベルリン、ハンブルク、ブレーメンといったドイツ北部の主要な都市が挙げられます。こうした都市部において仕事を有していた人々の中で、失業などにより経済的に困窮した人が生じたことに加え、移民会社がこうした都市部で主として営業活動を行っていたことが考えられます。また一方で、移出元として顕著に現れるのは南西ドイツであり、南西ドイツの広くから分散して移民をみています。かつて、ヴォルガドイツ人を、そして、その後、ドナウ・シュヴァーベンを送りだす同じ地域からテラノーヴァに移民を送りだしていることになります。加えて、東プロイセンの炭鉱のあるシレジアからもテラノーヴァにきています。いずれにしても、ドイツの広い範囲から非常にさまざまな職業をもつ人がテラノーヴァを訪れています。このことは、テラノーヴァのドイツ社会の大きな特徴ではないかと思われます。同じ場所から同じ地域へ、同じ宗教を信仰する人たちが同じ村へやってきているわけではありません。ドイツといっても非常に多様な文化的背景とアイデアをもつ人た

ちがテラノーヴァの社会を作り上げているといってよいかと思います。

どこからきたかということを紹介しましたが、では、どのような職業をしていた人々なのでしょうか。わかっているものだけで、エンジニアと大工、教員がそれぞれ7名います。それから元兵士や左官、靴職人、仕立職人などその他の職人もいました。農業をやっていた人も15人に上り、実はそれなりにいます。加えて、工場労働者や、炭鉱で働いていた鉱山労働者、商人、事務職もおりました。それから世界中を歩き回る旅行家とか、博士号を取得した植物の専門家もいますし、非常に多様な職業をもつ人たちでテラノーヴァは構成されていました。ドイツの多様な地域からテラノーヴァにやってきていると同時に、社会において多様な職業をもつ人がテラノーヴァにやってきています。ここテラノーヴァにおいて一つの社会、そして経済活動がある意味成り立つような、そういった状況が存在していたといえます。大工さんもいる。教員もいる、農業をやってきた人たちもいる、商いをしている人もいる――お互いで補完し合うような状況がうまくいけばできたのではないかと思われます。

入植の初期の頃の写真が残っています。まず、住むための住居を建てる必要があります（**写真1**）。初期には典型的な非常に質素な建物が建てられました。その後、生活の安定と共に、また、居住地の移動に伴って、より堅牢な住居に建て替えられていきます。移民会社が推奨したように、自家用、販売用としての肉をえるために豚を飼い、また、乳牛を飼っていた様子がうかがえます（**写真2**、**写真3**）。また、多くの家庭では、ブドウを栽培しワインを醸造していました。また、ホップを作りビールの醸造も試みられていました。

入植時から時代が飛んでしまいますが、最初の入植から40年近くたった時点における農業の状況を示す記録があります。まず、1972年における土地所有の状況です。住宅区画と耕地区画に1筆ずつ所有している入植者がいます。これは入植当初の所有の原型ともいえ

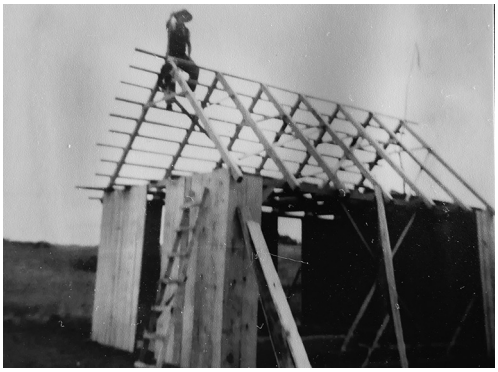

写真1　入植当初（1933年頃）における住居の建設
（Agatha家所蔵）

写真2　入植当初（1933年頃）における豚の飼育
（Agatha家所蔵）

写真3　入植当初（1933年頃）における牛の飼育
（Agatha家所蔵）

るものです。加えて、住宅区画で隣り合う4筆をもち耕地区画を1筆を有するもの、住宅区画で隣り合う2筆と耕地区画において離れた2筆を有するものもいます。ここにおいて、一旦は入植したものの、ドイツへ戻るなどテラノーヴァからでていった入植者がおり、撤退した彼らの土地を、残った人が入手して、経営規模を拡大している様子がうかがえます。また、住居区画において割り当てられた1筆から離れて、他の耕地区画において新たに住居を設けて、そこで新たに農業を始める入植者もいます。なかなか追っていくのが難しいのですが、テラノーヴァという入植地の中で、土地所有が頻繁に入れ替わっており、土地の流動性が非常に高いといえます。

この頃のテラノーヴァの入植者の構成は、ドイツから直接きたドイツ人がほとんどで、他のブラジル入植地から移動してきたドイツ系も若干います。彼らの農業経営をみると、所有面積は平均して45haであり、最小で4ha、最大で120haに及びます。所有地が草地の住宅区画と森林の耕地区画の部分それぞれにどの程度あるかは入植者によって様々です。既に、耕地区画のみにしか所有地をもたない入植者もいます。トラクターを所有しているのは54軒中11軒にすぎず、一方で、馬はほぼ全ての家で2頭程度みられます。当時においては、馬が役畜として、また、運搬手段として重要であったことがみてとれます。ただ、自動車の保有も14軒あり、徐々に普及してきている状況にありました。

ほとんどの農家で、乳牛と豚の飼養がみられ、入植当初の農業経営が踏襲されてきているといえます。乳牛の飼養頭数は、1、2頭から40頭と農家によって差がありますが、平均的には10頭程度です。牛乳の生産、酪農が農業の一つの柱でした。この酪農が基本的には今日まで継承されてきているといってもよいかと思います。加えて、豚の飼養ももう一つの柱です。ここでも1、2頭から100頭まで、飼養頭数には大きな差があります。頭数の少ない農家では自分の家で屠殺をして自家用、食用に、頭数の多い農家では販売用に飼養しています。畑では、牛や豚といった家畜の飼料となるトウモロコシが主として栽培されていました。その規模も1haから17haと家畜の飼養頭数に応じて幅があります。さらに、畑では米、小麦、ソバなどの穀類、キャッサバ、サツマイモ、ジャガイモといったイモ類が栽培され、自家の食料として、また、飼料としても用いられていました。加えて、半数ほどの農家で、ブドウやその他の果樹を栽培していました。いうまでもなく、ブドウからはワインを造り、果樹は生食ないしジャムなどにして食していました。いずれにせよ、農地の集約によって規模拡大が図られたとはいえ、経営規模としてはそう大きくはなく、販売も行われていたとはいえ、自給的色彩の濃い家族経営の農業が営まれていたといえます。

入植したある家族の例を紹介します。アーヘンの近くの小さな町の教員の家庭で生まれた8人兄弟のうち、失業していたエンジニアの一人が、肉屋とケーキ屋をしている兄弟それぞれに声を掛け、1933年に3人でテラノーヴァにやってきました。当時、個人では入植が認められず、家族でなければ入植ができないので、兄弟を誘ったとのことです。誘われてテラノーヴァにきた肉屋をしていた兄弟は、結婚して3人の子どもをもちました。そのうちの一人の娘さんが同じようにテラノーヴァにやってきた移民2世と結婚して、子どもを4人もうけまして、そのうちの2人がテラノーヴァで農業に従事しています。兄弟それぞれ住居は異なりますが、同じ農場で協力して経営を行っています。現在、この農場は、耕地80ha弱、牧草地8ha程度で、乳牛を100頭前後、飼っています（**写真4**）。こうした形態はテラノーヴァでは多くみられるようで、今後しっかり把

握する必要があると考えています。1人だけで、1世帯だけで農場を経営するだけではなく、こういった兄弟であるとか、親子、あるいは叔父と甥、こういった複数のいわば大家族の中で一つの農業経営を行うことが彼らの戦略といいますか、そうせざるをえないような状況があるのではないかと想定しています。この例では、8人兄弟のうち3人がブラジルに入植しましたが、他の5人のうち、アメリカとオーストラリアへ入植した人がいます。彼らが子孫と共に一同にこのテラノーヴァで会したこともあるそうです。このように家族の紐帯が強いということも一つの特徴であり、こうした紐帯に基づいて、兄弟など親類共同で農業経営が行われているといってもよいかと思います。

写真4　H農場における畜舎（2019年9月筆者撮影）

Ⅳ．テラノーヴァにおけるドイツ文化とドイツ語の継承

ここで、現在のテラノーヴァにおける民族集団ごとの居住地をみてみます。本来、住居が立ち並ぶことが想定されていた住宅区画にはほとんど住宅はなくて、基本的には、テラノーヴァを南北にほぼ平行して貫く主要な3本の道路に沿って家々が点在しています。当初、移民会社が意図していた集村ではなくて、散村となっているといってよいでしょう。これは農業経営上、当然、効率的ですし、ここで非常に面白いことは、ドイツ系の世帯の密度が中央部あたりで高いことです。ほぼ全てがドイツ系である純粋なドイツ系地区となっていて、この中心から外れて南に行くとブラジル人が現れ、そして東の方ではポーランド系が混在してきます。ちなみに、テラノーヴァの東はポーランド人の入植地があります。また、テラノーヴァの北東部や北西部は、先ほど触れたように低湿地ですが、オランダ系が占めています。

集落の中では、ドイツ系の人たちが互いに行き来をし、お茶やビールを飲み、ドイツ語で談笑する姿をみることができます。ここで、ドイツ語といっても、ドイツのそれぞれの地域で方言があります。ドイツの多様な地域から多様な方言をもつ人々が集まってきたテラノーヴァでは、標準ドイツ語がお互いのコミュニケーションのために用いられてきました。また、集落の東のポーランド系と混在する地区では、父がドイツ系で母がポーランド系であるオーナーによる雑貨屋兼飲み屋があります。ここには、ポーランド系もくれば、ドイツ系もきて、彼らのコミュニケーションの場になっています。このように集落の中心部においては、ドイツ系の人々同士の交流により彼らの文化や言語が維持されていく傾向にあり、一方、周辺部においては、近隣の他の民族との交流により、彼らのもつ文化的特質が変化する可能性があります。

実際にテラノーヴァでは、彼らの有するドイツの文化や言語は維持されてきているのでしょうか。テラノーヴァのみならず、ドイツから海外へ移住する人々に対する「十訓」なるものがドイツにあります。元来、ある移民家族に伝えられたものですが、様々な雑誌や新聞にも掲載され、ドイツでも非常に有名だそうです。ドイツ人が海外に行って入植するときの戒め、注意事項が示

されています。「よその地で、祖国に泥を塗るな。ドイツ人であることを考えろ。」、「新しい故郷の言葉を学べ。しかし、母語も忘れるな。」、「よその地の生活や習慣などを批判するな。この地は、子どもらの祖国となること考えろ。」など、ドイツ人としての誇り、アイデンティティをもち続けること、ドイツ語を保持し続けることを強調しています。一方で、新しい土地における言語や文化を学び尊重することも必要であるとしています。このような戒めがあっても、テラノーヴァにおける若い層、彼らの多くは移民3世に当たりますが、ドイツ語をもはや話さなくなってきています。

一方で、テラノーヴァでは、1年中さまざまな行事が催され、その中でドイツ文化を継承してきています。たとえば、1月6日の三賢人の日には、子どもたちが村を練り歩き、全ての家を訪問し、ドイツ語のクリスマス曲を歌い、フルートを演奏します。5月の収穫感謝祭は、古いトラクターが教会へ向かう行進で始まり、ダンスグループのメンバーが、収穫感謝の王冠をもってきます。そして、教会でのミサが主としてドイツ語で行われ、昼食としてシュペッツェレ、グーラーシュ、アイスバインなどドイツ風の料理を食べます。こうした宗教的行事に加え、7月25日はテラノーヴァの誕生日として、ドイツ文化の夕べが催されます。演劇が行われ、ドイツ語教室に通う生徒が歌を歌い、詞を朗読し、ダンスグループが民族ダンスを披露します。そのあとコーヒーとケーキを楽しみます（**写真5**）。ここで皆がまとっている民族衣装ですが、皆さんもよくみかけるようなデザインです。これはバイエルン地方の民族衣装です。既述のように、ドイツの様々な地域からテラノーヴァに移民がきている中で、誰かの出身地の民族衣装を選ぶとなると角が立ちます。フランケンもバイエルンの一部なのですが、バイエルンの中心地域からはきていないので、そこの民族衣装を選んだとのことです。加えて、1週間に1回、学校で子ども向けにドイツ語の教室、ドイツ語の勉強会が行われています。そして、このドイツ語教室の後、子どもらはドイツのダンスを習っています。

こうした村の様々な活動、催しは、テラノーヴァの人々が結成した協会「レク・文化クラブ7月25日」の集会所で行われます。集会所の広いホールには、ドイツの旗がブラジルの旗と並んで掲げられています。加えて、ヨーロッパアルプスの風景写真が飾られていたりして、彼らの故郷への思い、愛着が感じられます。

写真5　「テラノーヴァの誕生日」の集い
（2018年7月Hubert氏撮影）

写真6　移民博物館の展示物（2018年8月筆者撮影）

彼らのドイツ文化や歴史に対する思いは、テラノーヴァにおける博物館の創設にも現れています。入植当初の小屋を使って、入植当初の生活を再現し、そこにドイツからもってきた生活用品を展示している個人がいます（**写真6**）。同じように博物館をつくりたいという人が何人もいます。住居を新築しても古くからの家を残し、それを将来は博物館にしたい人や、ミシンやグラスや様々な小物を集めて私設博物館としている人もいます。こうした動きは、現在、合衆国の各地で様々な民族集団によって、彼らの文化や歴史を紹介する移民博物館が盛んにつくられていることと軌を一にするものでもあります。

最後に彼らのライフスタイルに垣間みるドイツ文化についても触れておきたいと思います。テラノーヴァの移民2世も既に高齢化して引退期に入ってきています。彼らは、彼らの暮らしてきた古い家をそのまま維持し手を入れて非常にきれいに保っています。ドイツ人は、住居に手を入れてきれいに保つという評判がありますが、まさにそれを地でいっています。ビアマグを戸棚の上に並べることも、ドイツの家庭ではよくみられることです（**写真7**）。さらに彼らの中には、牛を1頭だけ飼って、森の中に自給自足的な生活をしている夫婦もいます。それは単に貧しさに甘んじているのではなく、夜には読書をし、思索して過ごすような人たちであり、あえて自然と共にある質素な田園生活を選んでいるようなところがあります。生活上にみられるこのような指向性は、テラノーヴァへの移住者が、農民だけではなく都市におけるホワイトカラーを含む多様な職業層、社会階層から構成されていたことから生みだされてきたものかもしれません。

写真7　ドイツ家庭におけるビアマグ
（2019年8月筆者撮影）

そして、こうしたライフスタイルは、私が今、農村移住の調査のために通っているオーストリア・チロル州のアルプス山中を訪れるドイツ人のそれを思わせるものです。そこでは、アルムという夏の高原牧場の建物を借りて、都市部から毎週のように訪れたり、ほとんど年中住んでいるドイツの人たちがいます。電気も通らない、水道もないところですが、あえてそうしたところを選び、そこでの生活を楽しんでいるのです。自分なりにベランダを作ったり、自分なりにきれいに部屋を改修してずっと使っています。テラノーヴァの人たちの生活をみていると、アルプスにおけるドイツ人に重なる部分をすごく感じます。同じような雰囲気を私は感じています。それがドイツ独特の文化なのか、ヨーロッパの社会全体にあるものなのか不確かですが、ある意味ドイツ的なもの、ドイツ的なライフスタイルというものをテラノーヴァにおける彼らの生活、引退した人たちの生活の中にみることができるかと思います。

時間を過ぎてしまいまして、すみません。まとまりのない雑ぱくな話になりましたが、これで私の話を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

〔本研究はJSPS科研費 JP18H00767（代表：丸山浩明）の助成を受けた〕

（やまもと　みつる　専修大学文学部教授）